11

箱根路を走る ― 柳 利幸 ―

学習した日　月　日

「八区は柳利幸です。早稲田で唯一、四年連続の出走となった柳、八区は一年生で経験して以来二度目の登場です。平塚中継所で早稲田の九秒後に襷リレーをした明治大学が追いついてきますが、柳は落ち着いて並走しています。そのままのリズムで前との差をじわじわと詰めています。八区の難所である遊行寺坂にやってきました。昨年は並走しながらも途中で明治に差を開かれてしまった柳、今年は違います。明治を引き離し、そのまま一気に差をつけています。」

平成二十八年正月の箱根駅伝のテレビから流れるアナウンスである。襷をもらい襷をつなぐことだけを考えて走った箱根も今年が四度目、最後となった。昨年は区間四位、早稲田大学の記録を更新したが柳は決してそれだけで満足していなかった。チームが優勝してこそ本当の喜びがある。名門早大の復活をかけて、最後の箱根を走っているんだという思いを噛みしめて駆け抜けよう。柳の思いは高まる。

名門早稲田大学競走部で四年連続箱根を走ることができたのも、実は、柳には中学校・高校時代に学び得たものがあったからである。

現在僕は、早稲田大学競走部に所属し四年目を迎えている。あの時、友人が僕を誘ってくれなければ、今頃は平凡な大学生活をしていたに違いない。陸上を始めたころの僕には、今のような姿を全く想像できなかった。

今でも、僕はあの日を忘れない。幼稚園のときから始めたサッカー。幸手西中学校時代には高円宮杯で埼玉県五位という成績を残すことができ、Jリーグの選手になることを夢見ていた。自分でも自信があり、周囲もそれを認めてくれていた。

陸上競技と出会ってわずか五年。幸手市立西中学校卒業、早稲田大学四年の柳利幸は、無我夢中で過ごしてきた。襷をもらい襷をつなぐことだけを考えて走った箱根も今年が四度目、最後となった。昨年は区間四位、早稲田大学の記録を更新したが柳は決してそれだけで満足していなかった。チームが優勝してこそ本当の喜びがある。名門早大の復活をかけて、最後の箱根を走っているんだという思いを噛みしめて駆け抜けよう。柳の思いは高まる。

名門早稲田大学競走部で四年連続箱根を走ることができたのも、実は、柳には中学校・高校時代に学び得たものがあったからである。

現在僕は、早稲田大学競走部に所属し四年目を迎えている。あの時、友人が僕を誘ってくれなければ、今頃は平凡な大学生活をしていたに違いない。陸上を始めたころの僕には、今のような姿を全く想像できなかった。

今でも、僕はあの日を忘れない。幼稚園のときから始めたサッカー。幸手西中学校時代には高円宮杯で埼玉県五位という成績を残すことができ、Jリーグの選手になることを夢見ていた。自分でも自信があり、周囲もそれを認めてくれていた。

右サイドバックとして豊富な運動量でクロスを磨き、自信をもって臨んだ高校サッカー。自分の夢の実現への第一歩であった。でも高校サッカーは違っていた。部員はJリーグの下部組織出身者が多く、レギュラーをとるのは単なる努力だけでカバーできるほどやさしいものではなかった。下部組織で鍛え上げられたセンス、大胆な動きや細心の技、どこをとっても勝ち目がない。とうとうレギュラー争いからも脱落。高いフィジカルとテクニックが求められる高校サッカーにはどう努力してもそのレベルについていけなかった。

大きな夢と希望は厳しい現実にうちくだかれ、ただ練習を消化しているだけの毎日を送っていた。

（なんのためのサッカーだろうか。このままの生活でいいのだろうか……。）

揺れ動く気持ちは抑えられない。そんな生活に耐えられなくなり、やめることを考え始めるようになった。今までずっと続けてきたサッカーをやめてしまっていいのだろうか。やめてしまったら今まで続けてきたことが無駄になってしまわないだろうか。しかし、このままでは……苦悩の毎日だった。

高校二年生になり、意を決してサッカー部を退部した。約一ヵ月、自分は何をすべきかを考え、悩んだ。家に帰ってもふさぎ込んでいた。心配した母がいろいろ声をかけてくれたが、こたえることができなかった。退部したものの、新たな目標が見つからない。

そんな時だった。陸上部の友人が

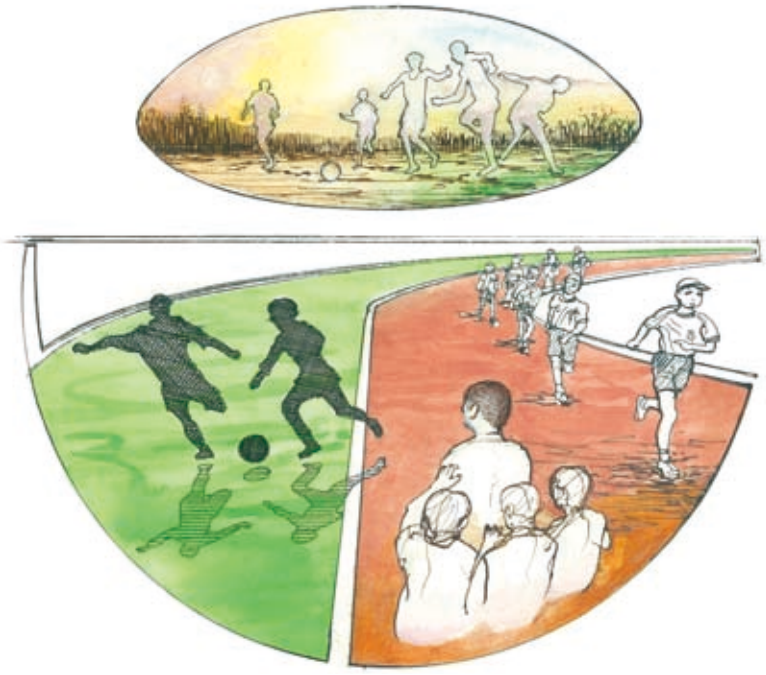
「陸上をやらないか。サッカー部の君を見ていたら、陸上でも十分やれるだけのスピードと持久力があると思うんだ。陸上という新しい世界にチャレンジしてみろよ。」

と誘ってくれたのだ。

ずっと続けてきたサッカーをやめた僕が、誘われたからといってすぐに陸上部に入ってもいいのだろうか。様々な思いが交錯した。

そんな時、僕の頭によぎったものがあった。サッカーの技術では劣っても走ることなら負けない自信がある。

『幸手市小中学校ロードレース大会区間最高記録八分十三秒（平成二十年度）』



今でもこの記録が残っている。このまま何もせずに高校生活を送っていたら、もっと自分が駄目になるのではないか。陸上という新たな道で一からやり直してみよう。

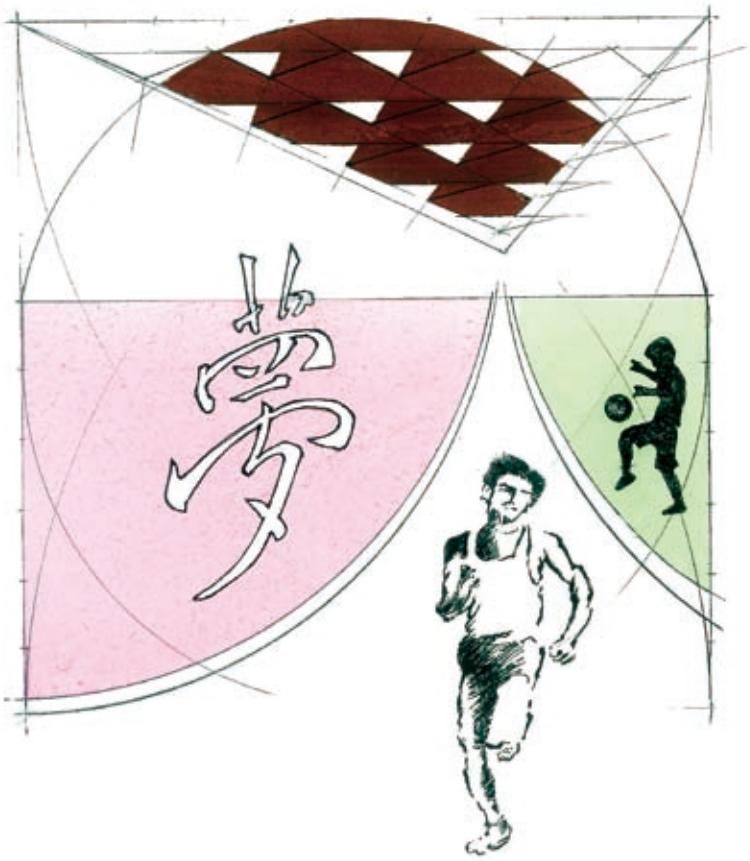
悩んだ末、二年生の三学期から陸上部に入部することを決意した。陸上への挑戦だ。幸いにも陸上部の人たちは僕を温かく迎え入れてくれた。三年生で正式に入部。高校総体県予選三千メートル障害で優勝することができた。北関東大会ではけがを負いながらも七位になった。高校駅伝県大会では一区を走り二位となり、全国都道府県対抗駅伝の埼玉県代表に選ばれた。

（自分にこんな能力があったんだ。）

走ることに夢中になった。サッカーをやっているときは、がむしゃらに走っていたが、今はペース配分を考えるのがおもしろい。自分が頑張れば自分に返ってくるし、よいタイムを出したときの達成感も心地よい。

まだ、僕は満足しない。もっと上のレベルで走れるように、一つ一つの試合を本気で、トップをめざして走ることができるよう努力していく。過去はどうあがいても変えられないのだから。自力でなんとでも変えられる未来を見据えて一歩一歩前進していきたい。

四度箱根を走り、四度目は団体四位、個人区間三位に輝く柳利幸、いろいろな思いを胸に箱根を走った。その確かな足取りで。



● 自分の中にある「よいところ」を見つめ、どのように伸ばしていきたいか書いてみよう。